

第9回エクセレントNPO大賞 総評

1. エクセレントNPO大賞受賞者「二枚目の名刺」について

(1) 二枚目の名刺がめざす社会的な意味

「二枚目の名刺」は、社会への様々な想いをもつ人々が、所属する組織や立場を超えて能動的に、新たな仕事やボランティア活動を通じて社会的役割に挑戦できるようNPOとの出会いをサポートしている団体です。意識調査・研究に基づいて目標を設定し、事業運営に関する人財の発掘と活用、育成にも注力して、多様な生き方への挑戦や市民として成長していくための新たな学びに応えています。さらに、働き方改革や副業・兼業といった働き方の多様化など制度環境の変化を見据え、モデル就業規則の改訂などの制度設計を、政府や業界団体と連携して行ってきました。

設立から12年、延べ5000人が参加し、150のNPOが協働しました。年間100本の報道など戦略的な広報活動を通じて、「二枚目の名刺」という言葉が広く知られるようになっていきます。

誰もがNPOや社会活動との接点を持てるしくみ作りは、日本社会の市民性を育み、社会を変革しようとする試みといえます。働くことの意味が問われる人生100年時代において、将来の日本社会において重要な問題提起をしています。

(2) リポートによって磨かれた自己評価力

同団体の応募は、今回で4回目になります。応募し続けてきた理由として「定期健康診断のつもり」と述べています。応募にあたり、一定の基準で自己評価することによって、自らの活動や組織を振り返り、強みや課題を確認することができます。本賞では、全ての応募者に審査のフィードバック・コメントを記して返送していますが、自己評価の際にそれを参考にされていることが、記述ぶりの向上からよく伝わってきました。

審査結果では、『市民性』のみならず、『課題解決力』、『組織力』のいずれにおいても「大賞」に相応しい高い評価を得ました。特に、自ら取り組む課題を、社会的マクロの視点と、取り組みにおけるミクロの視点の両面から整理し、また、課題に即した明確な目標設定、目標に照らした成果の測定がきちんとできています。この点は、エクセレントNPO基準に基づく評価でもっとも難しいところですが、一貫した論理性をもって自己評価がなされていました。

2. 第9回エクセレントNPO大賞をふりかえって

(1) 応募の状況

今年の応募総数は76件でした。昨年に続き若干の減少傾向が続いており、その背景には色々な要因が考えられますが、コロナ禍の長期化が、資金や人材や活動範囲の面な

どで、ボディブローのように影響を及ぼしているのではないかと思います。

子ども、教育、医療、国際協力、芸術や芸能、シニアなど多様な分野から、熱い思い溢れる応募がありました。

今回の募集にあたって、過去にご応募くださった870件以上の団体に直接お電話をさせていただきました。団体の活動を知ってもらうためにも応募したいが、コロナ禍のために活動を縮小したので応募できないという声も聴かれました。この時期だからこそ、社会の更なるサポートが必要です。自らの活動を客観的に評価し、これからのポスト・コロナ社会で求められる活動に備えてさらなるチャレンジをしていただければと思います。

(2) 審査方法 ～審査ボランティアの活躍～

審査は2段階で行っています。

第1次審査では、よく訓練された審査ボランティアが重要な役割を担っています。今年度は公務員、企業人など23名の方々に参加していただきました。この方々は政策評価や人事評価など仕事において評価経験のある方々ですが、さらに、NPOのために開発した“エクセレントNPO基準”を十分に理解した上で、熱意をもって採点し、コメントを記しています。審査ボランティア自身も、この作業を通じてNPO活動の実際について多くを学び、感銘を受けています。ある審査ボランティアが、「『自分が担当した団体が受賞するのでは』と、ドキドキしながら表彰式を見守っていました」と語っていたのが印象的でした。

最終審査では、審査委員が、一次審査で行われた基準ごとの採点結果をもとに審議を行い、各賞と大賞を決定しています。

(3) 審査上の論点

a. 新たな基準

評価基準は、『市民性』、『課題解決力』、『組織力』の3分野において合計15基準で構成されています。これまで、応募者の自己評価の状況、NPOの社会的動向や課題を踏まえて、少しずつ構成を変えてきました。今回は、【基準11】の内容を改変し、「活動の改善点や新たな活動のヒントを見出し、それを事業の方法や次の計画に反映していますか」という「組織の刷新力」の要素を加えました。活動対象や社会環境の変化を敏感に捉え、それに対応すべく工夫・改善しているかどうかを問うものです。

この基準に対して、応募者の方々は想定以上に基準の意味を理解して記されており、PDCAを回すことの重要性を意識して事業運営されている様子が伝わってきました。

b. 市民性をめぐる議論

審査委員会では、毎年、議論が白熱しますが、本質的な新たな論点が提示されることがあります。今年度は『市民性』において、ボランティアの捉え方、寄付形態の在り方に関する議論がありました。

ボランティアの概念は幅広く、例えば、対価を伴うものは「有償ボランティア」、専門的な知識や技術を提供するものは「プロボノ」と称されます。また、イベント参加などをアドホックに担うボランティアのみならず、事務局や理事会をボランティアで支えることもあります。

寄付についても対価を求めない寄付や、返礼のような対価性を伴うクラウドファンディングなど様々な方法が生まれています。

今後も価値観やデジタル技術の変化に伴い、ボランティアや寄付の形態に様々なスタイルが生まれるでしょう。ここで重要なポイントは、寄付やボランティアは市民参加のための大切な手段であるということです。

P. F. ドラッカーは次のように述べています。

『現代の知識社会は、働き手の大半が知識ワーカーで構成されている。知識ワーカーは、その性質上、自らが拠り所とするコミュニティを職場ではなく、ボランティアとして参加するNPOに求める。そして、NPOに参加することで、社会課題を学び、市民として成長してゆく。』

この参加と成長こそが、ドラッカーが述べた「市民性創造」であり、エクセレントNPOの市民性基準の機軸をなすものなのです。

c. リポートして応募すること

今年度から応募用紙に応募回数を記す欄を設けました。この賞を重ねるごとに、馴染みのある団体名を目にする機会が増え、応募内容から、自己評価に真摯に取り組む姿を拝見してきたからです。今回、大賞を受賞された「二枚目の名刺」は、4回目の応募で「市民賞」と「大賞」の受賞に至りました。

また、ご応募くださった全ての団体に、審査のフィードバック・コメントとともに、「エクセレントNPOバッジ」をお送りしています。賞の種類ごとに色を変えているこのバッジは、自己評価を行い本賞に参加したことを示すもので、ホームページやブログ、名刺などに張り付けて活用していただけます。バッジの数は応募回数を示すものであり、自らの信頼性向上に向けて努力を続けていることの証としてご活用いただければ幸いです。

3. 今後の課題

コロナ禍が発生してから応募数が減少傾向にありますが、それぞれの応募から見えてきたNPOの課題、応募勧誘の電話口から聞こえてきたNPOの声に、今後どのように応えていくかは、私どもの大切な課題です。これまでフィードバック・コメントをお送りすることで、応募団体の自己評価力向上を後押ししてきましたが、今後これに加えて、勉強会などの支援の方法も探っていきたいと思えます。